巻頭言

植物画

(公財)日本植物調節剤研究協会 東北支部長 **田中 良**

「植物画」は，植物を細部まで写実的に描き，その美しさから「ボタニカル・アート」とも呼ばれている。

その歴史は古く，写真はもとより印刷技術がなかった時代から，薬用植物を識別するために描かれていた。その後，ヨーロッパでは大航海時代に世界各地の珍しい植物を紹介する大図譜が刊行されたり，王侯貴族が庭園の美しい花木を絵師に描かせたり，また，園芸雑誌の表紙を飾るようになり，今日の「花の肖像画」とも呼ばれるスタイルができあがった。例えば，江戸時代に日本に渡来したシーボルトの植物図譜「フロラ・ヤポニカ」，フランスのナポレオン妃のためにル・ドゥーテが描いた「バラ図譜」，英国でカーチスが発刊した「ボタニカル・マガジン」などの銅版画は骨董品としても人気が高い。

他方，一昔前の植物図鑑などには，文言では表現しにくい特徴や形態を一目瞭然に示す手書きの図が載せられていた。これらの図は写真製版技術の進歩によって写真にとって代わられてしまった感がする。ときおり，植物学者の牧野富太郎博士の「日本植物図鑑」や日本ボタニカルアート協会創始者の太田洋愛画伯の「原色植物図鑑」などの原画展を覧る機会があり，それらの細密に描かれた芸術的ともいえる作品の素晴らしさは何回みても感動してしまう。

植物画との馴れ初めは，学生時代に生物の実習時間に作物の形態をケント紙に鉛筆で描いた覚えがある。その後，勤務先が週休２日制になり時間を持て余すようになって，近所のカルチャーセンターに通い始めた。最初のモチーフは，水耕栽培で種から徒長した双葉のカイワレダイコン１本であったが，太田洋愛画伯に師事された講師の杉崎紀世彦・文子夫妻から拙い画を大いに褒めてもらったのがきっかけとなり，かれこれ十数年も習いつづけている。

実寸大で科学的かつ鑑賞に耐えうるように描くことを目標にして，モチーフを目の前に置き，サイズをデバイダーで測りながら鉛筆でスケッチし，透明水彩絵の具を面相筆で丹念に重ね塗りして仕上げていく手法である。

植物の形態を正確に描こうとすると，集中と根気が必要となる。一生懸命に描いていると時間を忘れ，ストレスもたまるが出来上がった時の達成感が解消してくれる。普段から見慣れた草花でも注視していると，形態の不思議さや合理性に新たな発見があるのも楽しみである。また，家族の辛辣な批評や思いがけない励ましは大きな喜びでもある。植物画を試験研究に置き換えてみると相通ずるところがある。

下図は，同好の作品展に出品した拙作であるが，「こんな雑草でも絵になるのか」との感想があり，満更でもない気がしている。